

ふるさと会海外研修基金研修報告

卒業論文の課題研究における現代イギリス英語の調査

国際学部外国語学科英米語専攻 13371041 曾我部 友里

私は、ふるさと会海外研修基金の助成を受け、イギリス・ロンドンへ行き自身の研究課題、そして卒業論文の題材である現代イギリス英語の情報収集を行うため 23 日間、イギリス・ロンドンにて研修を行った。

ロンドンへ行くのは今回が初めてであり、渡英前に、多くの論文や参考書を読み、イギリス英語、とりわけロンドン周辺地域で話されている 3 つの社会方言（イギリスの容認発音、コックニー、河口域英語）とイギリスの階級社会について情報を集めた。また、ロンドンの地理にも不案内だったため、事前にイギリスの地図を購入し、現地での活動をするにあたっての行動シュミレーションをしたり、訪れる地域について調べた。

8 月 8 日の夜にロンドンへ到着し、翌日から調査を開始する予定であったが、時差ボケで体調が優れず、翌日は宿舎で体調回復に努めた。

ロンドンに到着した 2 日後に、本学の卒業生であり、現在天理教海外部に所属され、ロンドンの SOAS で博士課程の勉強をされている方に会うことができた。英米語専攻時代にはカナダにあるリジャイナ大学に留学、その後アメリカに 2 年間滞在され、現在ロンドンで 5 年間生活されている方だった。実際に会いロンドンでの生活や、アメリカやカナダで過ごされていたときに使っていた英語とはまた違って、言葉のアクセントや使用されている単語が違うこと、服装によって階級が違うという話を聞くことができた。階級によって就く職業が違うことや、使用する言葉が違うことは知っていたが、服装まで違うことは知らなかったため、貴重な話を聞くことができた。

以降、上流階級や非上流階級、RP、コックニーといった用語が多数出てくる。先に区分を述べておく。

上流階級は貴族や王族、地主、資産家などの職にあたる人々のことを指し、この階級の人々が話す言葉が標準イギリス英語（容認発音）である。なおここでは上位中流階級、職業でいえば医者、弁護士、大学教授等の専門職に就く人々も含む。

非上流階級は上記で述べた上流階級以外の人々のことを指し、肉体労働や職

人など、日雇い労働の職に就く労働者階級のことを指す。

・ ロンドン地下鉄（underground）の車内アナウンスメントの録音

活動計画書に記載していたようにロンドンでは欠かすことのできないロンドン地下鉄、通称 tube（以下；地下鉄）の車内アナウンスメント（以下；アナウンス）の録音を行った。ピカデリーライン、サークルライン、ディストリクトライン、ノーザンライン、ヴィクトリアライン、ジュビリーラインそしてセントラルラインの7つの地下鉄線でのアナウンスの録音を行った。

同じ地下鉄で、アナウンスも録音であったが録音によるアナウンスについてのアクセントに関しては大きな違いはみられなかった。

またどの線でも必ずアナウンスでは“mind the gap”と言われており、地下鉄のドアにもステッカーが貼ってあった。このアナウンスについては録音のものと、車掌が実際にアナウンスするときラインがあった。そのときの”mind the gap”の”gap”は同じラインであってもカタカナで表せば「ギャップ」と「ガップ」といった違いがあった。



イギリスでは日本語にあたる「気を付けて」を”mind”という単語を使っている

ことに気付いた。アメリカでは”watch”であり、この違いも現地に行って初めて知った。

・使用されている方言の調査

先にも述べたようにイギリスは階級社会である。その階級によって就く職業や収入も違い、また普段買い物をするスーパーマーケットや服装まで違う。通う人々の使用言語を調査するため、まずはロンドンで有名な高級デパート”Harrods”「ハロッズ」で調査をした。



事前に調査した階級別でみるイギリス英語の単語の違いを少しだけ上げる。

	上流階級	非上流階級
自転車	bike, bicycle	cycle
トイレ	wash room, powder room	toilet
聞き返すとき	What? Sorry?	Pardon?
お父さん・お母さん	Mummy, Daddy	Mum, Dad
子供	children	kiddy

表 1

表 1 が上流階級と非上流階級の人々が使用する単語を比較したものである。たとえば「トイレ」の表記。ハロッズでは事前に調査した通り、”toilet”の表記が上流階級者仕様の”wash room”であった。日本語でいえば「お手洗い」に相当する言い方であるだろう。そのほか、「セルフリッジ」”Selfridges”というデパートも調査したが、「トイレ」の表記は非上流階級の “toilet”であった。

また、ハロッズでは年上の女性に声をかける際は必ず “Hello, Madam”、年下の女性に声をかける際は”Hello, Ladies”であった。セルフリッジでは年代を問わ

ず”Hello, Ladies”であったが、オックスフォードストリートなどの大通りでお客を呼び込むときや声をかける際によく使われる、”Hi, girls”, “Hi, sweetie”, “Hi, darling”などの呼び方は一切なかった。

・容認発音 (Received Pronunciation, 以下;RP) の調査

標準イギリス英語といわれている RP は英国の人口のうち話されているのはわずか数パーセントしかいないといわれている。今ではロンドンを歩いてもなかなか耳にすることは難しいといわれているこの方言を調査するため、イギリス王室が位置するバッキンガム宮殿とケンジントン宮殿周辺にアンケート調査をするために行った。現地のイギリス人に会うことはできたが、アンケート調査には協力してもらうことはできなかった。しかし、私が道に迷ったときに、道を尋ねた際に一人の女性に出会い、ひとつの会話表現を覚えてもらうことができた。以下にその会話表現を記載する。

① “Where is Buckingham Palace?” 「バッキンガム宮殿はどこですか？」

② “Excuse me, do you know where I might be able to find Buckingham palace?” 「すみませんが、バッキンガム宮殿はどちらかご存知でしょうか？」

① は非常にシンプルで、私たち日本人が英語を学習した際に習った表現である。しかし②は回りくどく、アメリカ人などからすれば鼻につく言い方に思うだろう。

私は最初、道がわからず女性に道を尋ねる際、“Excuse me”をつけて①の表現を使った。その時、女性は快く道を教えてくれたが、少し会話を重ねていく中で、イギリス英語の調査をしていると伝えたところ、イギリス人なら②の表現のほうが好むと教えてくれた。

私はこの表現を教わった時に、本当にイギリス人はこの言い方を好むのかどうか不支持に思った。そこで実際に①と②の両方の表現を使って、現地の人に道を尋ねてみることにした。①の表現でも現地のイギリス人はみんな丁寧に道を教えてくれた。しかし、ある時、②の表現で道を聞いたとき、一人の女性が私に「あなた日本人？」と聞いてきた。日本人であると伝えると、「さすがね、イギリス英語を勉強したの？」と聞かれ、続けて「あなたのその英語ならほとんどの人は助けてくれるわよ。」と言われた。地下鉄の駅でいえば、ケンジントン宮殿が位置するサウスケンジントン周辺で出会った40代くらいの女性だった。この RP の調査をしていると、イギリス英語の特徴として知られる、“a”の発音はなめらかで、“r”の音を発音しない、母音に挟まれた“t”を比較的はつきり発音するなどの特徴がみられた。

・ コックニーの調査



コックニーは「ロンドンの下町英語」のことを意味する。コックニーの定義はメリー・ボウという東ロンドン教会「St Mary-le-Bow」の鐘の音が聞こえる範囲で生まれ育っている人達の訛りで、この地域は英語で「East End」と呼ばれている。コックニーには二つの意味があり、「East End」の人の訛りだけでなく、その人自身も示している。コックニーという人のイメージは労働者階級で、東ロンドン「East End」の市で働いている人たちのことである。コックニー発祥の地である「East End」は現在の Tower Hamlets 地区と Hackney 地区から成り立っており、このコックニーを調査するため、ロンドン塔やタワーブリッジへ行き調査をした。ここも観光地なだけあり、観光客でにぎわっており、アンケート調査とインタビュー調査ができなかった。しかし、観光地であるぶん、観光客向けのショップがあり、働いている人たちは地元の人が多く、客が店員に質問、それに答えている店員の話すアクセントはコックニーのものであった。客が”How much is this?”と聞いたことに対し、それが 8 ポンドであった。それを店員は”Aight Pound.”と答えた。客はわからなかったようで”Pardon?”と聞き返し、店員は指で数字の”8”と表した。また、最寄り駅である Tower Hill 駅は工事中であり、作業員が多くいた。その作業員たちが話している中で、一人の作業員が”Ouch!”といった後で別の作業員が”What’s appen?”と 2 回続けていった。聞いた瞬間には何を言っているのかわからなかったが、状況を加味して考えた時に”What’s happen?”と言っていたと理解した。また、少し離れた Temple 駅で私に声をかけてきた見知らぬ男性は、私が日本人とわかり、”I love aiku.”といていた。私は”aiku”の意味が分からず、何を言っているのかわからないという男性は自分の持っていたノートに”Haiku”と書き、”aiku”といった。これらはすべてコックニーの”h”の音が欠落するという典型的な特徴であり、実

際に使っている人に会うことができた。

また声をかけてきた男性は、平日の昼間にも関わらず T シャツに半ズボン、サンダル、バッグは持たず水をポケットに入れておりかなりラフな格好をしていた。ロンドンに到着してすぐに本学の卒業生である先輩に会った際に、服装も階級に関係していると教えてもらったが、長期間滞在してみて、平日や土日祝日など関係なく行動していると、ロンドンでは平日の昼間に半袖半ズボンにサンダルで出歩いている人は下位中流階級者または労働者階級であると知った。専門職など、上流階級者が就く職業についてはほとんどの場合はビジネススーツであるか、その職業のユニフォームを着用するのであって、日雇い労働者は作業着を着用、学生であればラフな格好をしていてもかならず手にバッグを持っていた。

・テムズ川河口域での調査

テムズ川河口域に相当する、エリザベスタワーやロンドンアイがあるウェストミンスターへも行き、調査をしたが、ここも観光スポットだけあり、観光客が大半であり、前述と同様、予定していたインタビュー調査ができなかった。数日にわけて何度もインタビュー調査かアンケート調査ができないかと試みたが、観光客ばかりで、イギリス人に出会っても調査には協力できないといわれてばかりだった。足を延ばしてオックスフォード大学のあるクライストチャーチにも行ったが、夏休みで大学生がおらず、ツアー観光客ばかりで、学生にアンケートやインタビューをすることができなかった。そこで、音声データの収集に切り替え、地下鉄に乗り、ビジネスマンや学生たちの会話を聞くため地下鉄のラインを変えて乗ったり、スーパーマーケットやデパートなど様々な場所へ行き、アクセントや言い回しなどの音声データの収集に努めた。この音声データの収集ではかなりの量のデータを集めることができ、代表的な特徴をはっきりとみることができた。

たとえば、河口域英語の特徴として、二重母音/ei/はおしなべて/ai/と発音され、“today”は/ tədəi/ではなく、/ tədəi/と発音され、語頭以外の/l/が母音化し、“milk”が/miuk/, “able”が/aibu/のように発音される。これらを現地で実際に耳にすることができた。しかしコックニーの時のような h の音の欠落はみられなかった。また“today”が/ tədəi/ではなく、/ tədəi/と発音されるように、“train”も“train”と発音されていた。同じように“water”も wɑ:tər”ではなく“wa-er”、“hard”を”hɑ:rd “ではなく“ha-d”と発音されていた。若者を中心にこの河口域英語が使われていると参考書に記載があったが、若者だけでなく、若者の親世代、60 代前

後の人々も使用していることが分かった。

- ・スーパーマーケットでの調査

階級によって通うスーパーが違ふと知り、実際にどうなのかを調べるために調査をした。イギリスには大手スーパーマーケットが4つあった。「Waitrose」はセレブ系の高級スーパー、「M&S」は自社ブランドが中心のスーパー「tesco」と「sainsbury's」は価格勝負のディスカウント商品も多いスーパーであった。上記スーパーすべてに足を運んだが、「Waitrose」は価格も少し高めであり、作業着を着た人の姿は見なかった。その点、「M&S」、「tesco」、「sainsbury's」は比較的どの階級の人でも行きやすい価格帯で、昼食の時間帯などは、多くのビジネスマンが訪れており、もちろん作業着を着た日雇い労働者であろう人もいた。そして、大手スーパーではないが、「Iceland」というスーパーがあった。このスーパーマーケットはほとんど目にすることがなく、オックスフォードに行った際に一度だけ目にしてみても、調べたところ、この「Iceland」は労働階級者向けのスーパーマーケットであり、イメージモデルもすべて労働階級出身者を起用するなど、労働階級者のために作られたスーパーであるようだ。そのため、労働階級者以外はこの「Iceland」は利用しない。

今回このような機会を与えて頂き、実際に調査をしていく中で、自分の「五感」で感じる事が、どれだけ大切なものか分かった。どれだけ多くの参考書文献や資料を読み、理解したとしても、自分の目で見て、聞いて、感じたもの、それはなによりも一番の知識となり、そして本物の情報となると改めて感じた。

ただ残念だったのは、私自身が一番やりたいと思っていたアンケート調査とインタビュー調査、特にこれからの未来を背負っていくであろうイギリスの大学生に話を聞けなかったことは非常に残念である。自分の手元に資料としてこの先も残しておきたいと思い、事前準備としてアンケート用紙の作成やインタビュー内容を作成していたが、残念ながら、音声データのみしか資料として残すことができなかった。英米語専攻でありながら、まだまだ私の英語力が足りず、断られてもすぐにその場で別の案を出すなど最初の時点でできなかったことが今回の研修での反省点である。しかし、またとないこの貴重な機会を与えてもらい、自分の納得のいく、4年間の集大成である卒業論文を書き上げたいという気持ちと、内容で選出していただいたからには、手ぶらで帰るわけにはいかないと思い、考えているだけでは日時が立つばかりでなにも収穫できずに終わってしまうと考え、音声データの収集に変更した。音声データはロンドンの人々が普段話すごく自然な会話であったり、構えたアクセントや言い回しでは

なかった為、十分な量のデータを集めることができた。またアメリカ英語とイギリス英語の違いもはっきりとみられ、RP 調査のところで述べたように”a”の音はしつこくなくやわらかい発音であったり、語末にくる”r”の音は落とすなど、文章でみたとおりの特徴がみられた。”a”の音であれば有名スポーツブランドの”adidas”はアメリカでは「アディーダス」であるのに対し、イギリスでは「アディダス」となる。同じように”asics”はアメリカの発音であれば「エイシックス」であるが、イギリスの発音だと「アシックス」と日本と近い発音になる。また”can’t”はアメリカの発音の「キャント」ではなく「カーント」と必ずといっていいほど発音していた。

このような違いはアンケート調査の記入式の調査ではわからなかったと考え、特にスポーツブランドの発音の違いなどは私自身、非常に興味深くおもしろいと思った。帰国後、卒業論文の執筆が本格化していく中で現地での経験・調査は非常に役に立っており、また先行研究の具体的な問題点も見つけることができ、解決策と、現代イギリス英語の将来の在り方については渡英前よりも深く考え推察するようになった。実際に現地で調査し、持ち帰ってきたものはこの先、ますます本格化していく卒業論文の執筆に盛り込んでいき、以前よりも関心が深くなったこともあり、卒業後も研究を続けていきたいと思う。